

『古代アメリカ』14, 2011, pp.83-88

<調査研究速報>

## エルサルバドル共和国ヌエバ・エスペランサ遺跡

### 2011年調査速報

市川彰

(名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期／日本学術振興会特別研究員)

松崎大嗣

(東海大学文学部歴史学科)

八木宏明

(滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科)

#### はじめに

エルサルバドル共和国大統領府文化庁文化遺産局考古課とヌエバ・エスペランサ地区住民の協力を得て、筆者らはメソアメリカ太平洋沿岸部社会の実態解明を目的として、エルサルバドル共和国ヌエバ・エスペランサ遺跡の考古学調査をおこなっている。本稿では2011年調査成果のうち、特に土器製塩に関連する考古資料を中心に報告する。

#### 1. メソアメリカにおける製塩研究略史

メソアメリカ地域においては、塩をめぐる交易やそれらを支える専門集団に関する考古学研究、植民地時代あるいは現在でもみられる伝統的製塩法に関する民族学研究が主におこなわれてきた [e.g. Andrews 1983; Reina and Monaghan 1981; Thompson 1966; William 1999; 桑原 2009]。

しかし、塩の流通や集団組織といった問題を考古学の立場から検討する場合、はじめに流通や集団組織といったものを想起させる集約的な製塩法のあり方を明らかにする必要があるだろう。先スペイン期メソアメリカでは主に Sal Solar と Sal Cocida という2つの製塩法があるといわれている [Andrews 1983:16-18]。前者は主に塩田などを使用し、後者は土器などを用いて結晶塩を採取する方法である。塩田は現在でもユカタン地方などにみられるが考古学的に検出が難しいこともあり、土器などを扱う Sal Cocida に関する研究が考古学の射程といえるだろう。しかし、マッキロップらの研究 [e.g. McKillop 2002; Murata 2010] を除いて具体的に考古資料に基づいて先スペイン期における製塩法の実態とその歴史的意義に接近した研究は少ない。

## 2. ヌエバ・エスペランサ遺跡 2011 年発掘調査

本調査以前には文化芸術審議会文化遺産局考古課（現・大統領府文化庁文化遺産局考古課）と青年海外協力隊がヌエバ・エスペランサ地区住民の協力のもとおこなった 2007 年の調査がある。2007 年調査の概略については市川 [2010] に記しており、本稿では紙面の関係上割愛する。

### 2-1. 1 号試掘坑

2007 年調査区の南側に 2×2m の 1 号試掘坑を設定した（図 1）。2007 年出土の 1 号埋葬の周辺を確認すること、遺物包含層の堆積状況や遺構を確認することを目的とした。

イロパング火山灰層の一次堆積層とその上層からは遺物が一切出土しなかったが、黒褐色上層上面から完形土器 1 点が口縁を下にした状態で出土した。これは 2007 年出土の 1 号埋葬に伴う副葬土器と同じ状態である。しかし、人骨などは伴わず、1 号埋葬から離れているため別個の埋葬に伴う土器か、別の用途で置かれた土器であると考えられる。土器の特徴から先古典期終末期～古典期前期に時期比定される。

2007 年調査では海水が湧き出てしまったため約 0.3m の深さまでしか発掘することのできなかった遺物包含層は、本調査により少なくとも 1.2m 以上あることがわかった（図 2）。遺物包含層内の約 90% が粗製土器片である。ここで注目すべきは、黄褐色の固くしまった面（仮に「床面」とする）が検出されたことである。この床面は、検出状況からさらに広がるものと想定している。床面は平坦に整えられているわけではな

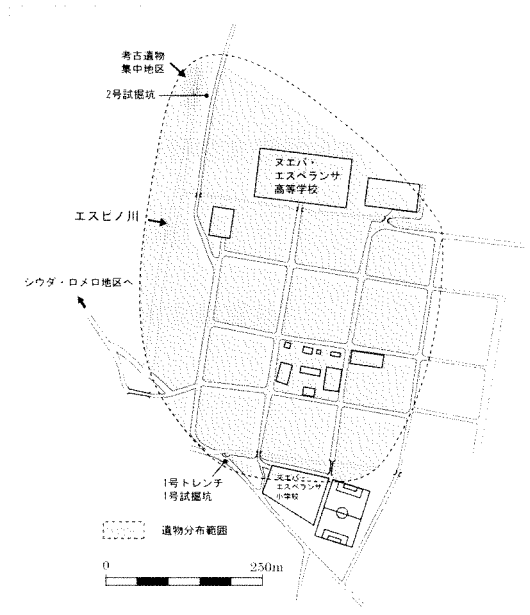


図 1 ヌエバ・エスペランサ地区地図

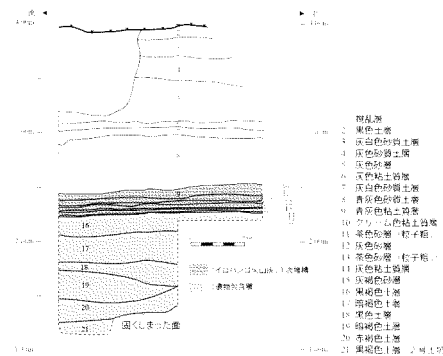


図 2 1 号試掘坑西側断面図



図 3 1 号土坑

く、若干の凹凸がある。試掘坑南東では焼上痕の広がりも検出された。

さらに、床面を掘りこんだ上坑2基が検出された。1号土坑は直径約0.4mの円形をなし、深さは約0.25mで土坑内からは少なくとも10個体の粗製土器片が見つかった(図3)。上坑の内壁および底面は床面同様に固くしまっているほか、粗製土器片は白色土層と黒色土層によって丁寧に覆われていた。遺物包含層やヌエバ・エスペランサ遺跡北側で粗製土器片が大量に出土する。一方で、1号土坑のように特殊な出土例もみられることから、粗製土器が当該社会にとって特殊な機能や意味を有していたものと推測される。

## 2-2. 2号試掘坑

ヌエバ・エスペランサ遺跡の北側エスピノ川の露頭には、南北に少なくとも20m以上、厚さ約2mにわたり粗製土器片の集中がみられる(図1)。この粗製土器片の集中する範囲を確認するため、エスピノ川から東約25mの地点に2×2mの2号試掘坑を設定した。

1号試掘坑と同様に、イロパンゴ火山灰層の一次堆積層とその上層からは遺物が一切出土しなかった(図4)。黒褐色土層内からは粗製土器片19点が出土したのみで、エスピノ川露頭でみられるほどの異常な破片の集中はみられなかった。したがって、エスピノ川露頭でみられる粗製土器片集中の分布範囲は少なくとも今回の調査区までは広がらないことが明らかとなった。

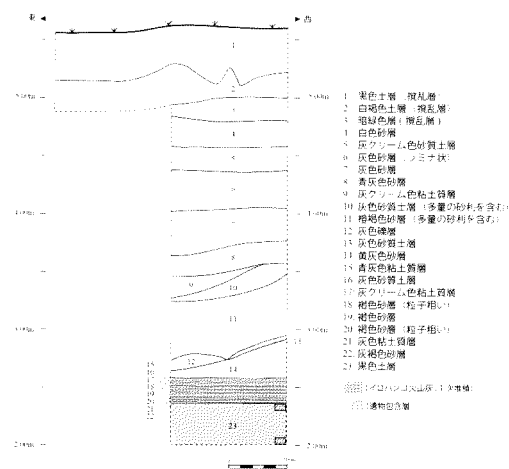


図4 2号試掘坑南側断面図

## 3. 出土遺物

土器を中心として、黒曜石、マンノ、貝などが見つかっている。ここでは、土器のみ報告する(図5)。

- ① 精製土器 (209点) : 粗製土器片と比べて極めて数量が少ない点が第一の特徴である。胎土に砂質粒子が含まれるものは準精製土器として分類した(80点)。浅鉢、壺形といった器形がみられる。装飾は、ウスルタン様式の文様がほとんどで、そのほか凹線、刻線などがみられる。1点のみ完形土器が出土している。口径26.6cm、高さ12.5cmのウスルタン様式四脚付浅鉢形土器である(図5.1)。Ichikawa(2011)の土器分類では、精製土器II類にあたる。
- ② 粗製土器 (2290点) : 全て破片で、焼成は劣悪で、もろい。器形は口縁資料に基づいた分類の結果、逆三角錐形をするA類、若干内湾するB類、直線的なC類に分類される。胎土は褐色、赤褐色を主として、粒度が極めて粗いのが特徴的である。比較的器壁の厚い部位に表面が膜状にはがれている現象がみられる。外面は器面調整が粗く、粘土紐の痕跡(註1)が観察できる。内面は外面と比較して器面調整が丁寧で、ヘラナデと思われる痕跡も一部破片にみられる。内外面に付着炭化物あるいは白色の付着物がみられる。

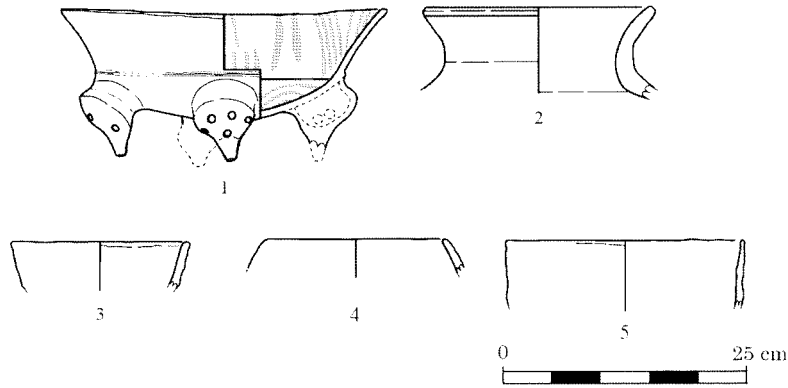


図5 出土遺物

1. ウスルタン様式土器（精製土器Ⅱ類）、2. オレンジ色壺形土器  
3. 粗製土器A類、4. 粗製土器B類、5. 粗製土器C類

#### 4. 製塩遺跡にみられる諸特徴

製塩活動の痕跡を考古学的に検証する場合、土器などの遺物だけでは不十分である。つまり、遺跡の立地、炉址や廃棄場などの遺跡構造などを含めた総合的な検討が必要不可欠である。こうした検討をおこなって製塩活動（この場合、土器製塩）の実態を明らかにした研究に近藤義郎氏らによる香川県直島町喜兵衛島遺跡の一連の調査がある〔近藤編 1999〕。この日本の調査事例を参考にした場合、製塩遺跡として考古学的に検証する場合に参考になる諸特徴に次のような点があげられる（表1）〔註2〕。

表1 製塩遺跡にみられる諸特徴

製塩遺跡として認定する参考基準		ヌエバ・エスベランサ遺跡		
【遺跡の立地・構造】	1. 遺跡の立地	原料海水の調達容易な地点 <sup>3)</sup>	○	
	2. 遺跡構造	a. 特徴的な損耗状態が観察される粗製土器の多量出土		○
		b. 他種（別用途）土器の出土地点と粗製土器の出土地点とが概ね分離できる		○
		c. 粗製土器と燃料残渣（灰・灰など）が存在する（圧熟作業を跡に廃棄を伴った状況）		○
		d. 炉体残骸と思われる灰、細砂、灰片、さらさらの貝殻片の堅い硬固物が作業面（原土面またはタタキ面とすい）及び土器壁で検出される		○
		e. 加熱作業施設そのものがその部材の有無（例：「焼付石」「灰土」）		○
		f. 土器廃棄層ではごく細片化した粗製土器片が多い		○
g. 海産付着種の微小且粗大な遺跡内に多量の海産類を付着させた形跡がある（原料海水の濃縮工程（採鹹工程）に関連する）		○		
【土器の諸特徴】	1. 土器の形状	a. 口縁と若干外側へ開く形態である <sup>4)</sup>	○	内湾形もあり
		b. 底部：平底・尖底・脚台付など高さは大きい、形態は口の形状に応じて変化する	○	丸底
		c. 相対的に内面を平滑に仕上げ、海水を防ぐ工夫がある（相対的に外面は粗雑である）	○	
		d. 器壁を出来るだけ薄造りとする（口縁部はやべがけに作ることも少なくない）	△	厚い土器もある
	2. 土器の損耗状態	a. ハイ生地状、特に外表面側に顕著な特徴的な割離がある	○	底部近くが多い
		b. 被熱変色が目立つ（炉体廃棄層中の土器片でもかなり多様な様相を呈する）	○	多様
		c. 灰白色の付着物（炭酸カルシウム <sup>5)</sup> ）の付着がみられる（あまり顕著でない場合もある）	△	多くの土器に付着

安直な比較検討は控えなければならないが、ヌエバ・エスペランサ遺跡の調査成果と上述した日本の調査事例の状況を比較すると、多くの類似点がかがえることは興味深い。もちろん相違点もある。しかし、日本各地の調査事例でも時代や地域によって多様な様相を呈しており、必ずしも一様である必要はない。むしろ、世界各地のそれぞれことなる自然環境に適応した独自の製塩活動が展開していた点に注目すべきであろう。

## 5. 今後の課題

現在取り組むべき課題には大きく次の3点があげられる。

第一に、炉址などの遺構の検出である。今回の調査では床面や埋納遺構が検出されており、今後の調査でも遺構を検出できる可能性は高い。また、火山灰に覆われているため保存状態の良好な住居址の発見も期待できるだろう。

第二に、遺物遺構の総合的な判断のうえで製塩活動を考古学的にあきらかにし、今後はレンバ川下流域の社会にとって集約的製塩活動が要求された歴史的背景、他遺跡との地域間相互関係などについて考察することである。

最後に、太平洋沿岸部社会における製塩活動も含めた多様な生業活動を明らかにすることである。2007年出土人骨の窒素・炭素安定同位体分析をおこなったところ  $C_4$  植物の高い摂取量が確認されている。また、牡蠣などの二枚貝や巻き貝、蟹などが出土していることから、多様な生業活動の存在が想定される。

## おわりに

エルサルバドル共和国においては、山間部に位置する遺跡と比較すると沿岸部の遺跡についてはほとんどわかっていない。レンバ川下流域の住民の話によると、ヒキリスコ湾にある島々においても土器などの考古遺物が大量に採集できるという。ヒキリスコ湾における考古学調査はまだ緒に着いたばかりであるが、本調査が今後のメソアメリカ沿岸部社会の研究に寄与できれば幸いである。

### 【謝辞】

本調査の遂行にあたりましてはエルサルバドル共和国大統領府文化庁文化遺産局考古課、エルサルバドル技術大学、ヌエバ・エスペランサ地区住民、名古屋大学からご支援ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。なお、本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費の成果の一部を含むものである。

### 註

(註1) 輪積みか巻き上げは不明である。

(註2) 大久保徹也教授（徳島文理大学）のご教示による。

(註3) 内陸でも塩湖や岩塩の採取できる地域など例外もある。

(註4) 液体を汲み置き、さらに加熱＝蒸発に適した形状であること。

## 参考文献

Andrews, Anthony P.

1983 *Maya salt production and trade*. University of Arizona Press, Arizona.

市川 彰

2010 「エルサルバドル共和国レンパ川下流域の考古学的調査」『古代アメリカ』13号、pp. 35-40、古代アメリカ学会、東京。

Ichikawa, Akira

2011 *Estudio Arqueológico de Nueva Esperanza. Bajo Lempa. Usulután*. Colección Arqueología 2. Secretaría de Cultura de la Presidencia. El Salvador.

近藤義郎編

1999 『喜兵衛島一師楽式土器製塩遺跡群の研究一』喜兵衛島刊行会、香川。

桑原安須美

2009 「現代グアテマラにおける土器製塩—マヤ系先住民族サカフルテコの黒色塩—」東海大学文学部考古学研究室編『日々の考古学 2』、pp. 499-518、六人書房、東京。

McKillop, Heather I.

2002 *Salt: white gold of the ancient Maya*. University Press of Florida, Gainesville.

Murata, Satoru

2010 *Maya Salter. Maya Potters: The Archaeology of Multicrafting on Non-Residential Mounds at Wits Cah Ak'al, Belize*. Ph.D. Dissertation Thesis of Boston University.

Reina, Ruben E. and John Monaghan

1981 The Ways of the Maya: Salt Production in Sacapulas, Guatemala. *Expedition* 23, pp. 13-33.

Thompson, J. E. S.

1966 *The Rise and Fall of Maya Civilization*. University of Oklahoma Press, Norman.

William, Eduardo

1999 The Ethnoarchaeology of Salt Production at Lake Cuitzeo, Michoacan, Mexico. *Latin American Antiquity* 10 (4), pp. 400-414.